

【研究区分：若手奨励研究】

研究テーマ：精神科病院における統合失調症患者に対する活動日記を用いた集団プログラムの効果検証に向けた予備的研究	
研究代表者：保健福祉学部 保健福祉学科 作業療法学コース 助教 今元佑輔	連絡先：imamoto@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者：保健福祉学部 保健福祉学科 作業療法学コース 准教授 織田靖史 准教授 高木雅之	
【研究概要】 精神科病院における統合失調症患者に対する活動日記を用いた集団プログラムの実施が、クライアントの作業遂行及び、主観的 QOL, 自己効力感, セルフモニタリングに及ぼす影響を明らかにすることを目的に本研究を実施した。参加者 5 名のプログラム前後の評価結果の中央値を比較すると, COPM の満足度, WHOQOL26, GSES において向上が認められた。活動日記を用いた集団プログラムは, 統合失調症患者の作業遂行の満足感, QOL, 自己効力感を高める可能性のある有用な治療プログラムのひとつになり得ると考える。	

【研究内容・成果】

1. 研究内容

研究協力機関である精神科病院にて本研究の協力依頼のチラシを掲示し、研究への参加を希望した方から対象者を選定した。その際に、①精神科病院入院中の統合失調症患者であること、②文章の記載が可能であること、③事前事後評価、活動日記への記載、集団セッションへの参加の同意が得られること、以上の点を満たしたものを対象者とした。また、認知症のあるクライアント（以下、CL）は除外した。その結果、本研究への参加の同意が得られた者 5 名を対象とした。参加者は男性 2 名、女性 3 名、4 名は同病棟で事前に面識があった。

プログラム実施前後にカナダ作業遂行測定（Canadian Occupational Performance Measure；以下、COPM）、生活の質調査票（WHO Quality of Life 26；以下、WHOQOL26）、一般性セルフ・エフィカシー（自己効力感）尺度（General Self-Efficacy Scale；以下、GSES）、認知行動的セルフモニタリング尺度を実施し、作業遂行及び、QOL、自己効力感、セルフモニタリングに変化があるかを測定し、結果を前後比較する。サンプルサイズが小さく、統計的な分析は困難と考えられるため、成果指標の中央値の変化を比較した。また、終了後のインタビューの結果より、主観的な経験についても考察を行った。

活動日記を用いた集団プログラムは、個別での活動日記の記載と集団でのセッションで構成されたものである。参加者は一日の満足度に影響を与えた作業経験を記録できる活動日記をプログラム期間中毎日記載した。集団セッションでは対象者のセルフモニタリングをサポートするように作業療法士（以下、OT）がファシリテーターとして参加者の記載内容を共有し、より自身への理解を深め、気づきが得られるような機会を作った。

従来の方法では、集団セッションは、週 1 回、1 セッション約 90 分、全 4 セッションであり、配布資料等もなかった。しかし、今回精神科病院の CL を対象としたプログラムを実施するにあたり、プログラム全体の振り返りを行う 5 回目の集団セッションを追加し、参加者がプログラム内容を振り返りできるような資料を配布するという変更を加えた。これは従来の対象者である地域で生活する高齢者等と比べ、プログラム終了後もしばらく入院生活を送る可能性が高い CL であるため、今後への繋ぎを丁寧にした方が良いのではないかと考えたことと、内容を確認できる資料があることで振り返りや OT への質問などに繋がり、より理解を深めることが出来るのではないかと予想したためである。さらに配布資料があることで、これまで活動日記を用いた集団プログラムを実施したことのない OT が取り組みやすくなるというスタッフ側のメリットも考えられる。これらの変更は、プログラム開発者に相談しながら決定し、許可を得ている。

参加者が毎日記録する活動日記は、その日に最も印象に残った作業を 1 つだけ選び、行っ

た作業，その満足度，感じたこと，そのときの作業経験，次の日にしたいことを記入する。満足度は5段階のフェイススケールで，作業経験については，「人と交流した」「人のためになった」「楽しんだ」「リフレッシュした」「頑張った」「物事を進めた・終えた」「うまくできた・いった」「新しいものを得た」の8項目から選択する。1週間の記録を基に，その週の満足度や作業経験をグラフで表すことが出来る。

集団セッションでは，参加者は1週間分の記録を見ながら，この1週間の中で印象に残ったことやその時感じたこと，その日のテーマなどについて OT や他の参加者と対話する。テーマは，「準備と体験」「今の生活」「今の私」「これからの私」「振り返りとまとめ」の5つである。1回目では，自己紹介，プログラムの説明と，活動日記の記入方法の確認などを中心に行った。2回目以降は，参加者全員で活動日記を見ながら，1週間の作業について話し，グラフを作成した。その後，その日のテーマについて資料を基に簡単な講義を実施した後，参加者で対話し，最後に次回までにしたいことを共有した。

なお，活動日記を用いた集団プログラムは，活動日記開発者にプログラム実施の指導を受けた研究代表者が実施した。また，プログラム参加者の病棟担当 OT が各1回ずつ参加した。活動日記を用いた集団プログラムによる介入中も通常の集団作業療法には CL の意志で参加し，その際には筆頭著者以外の OT がプログラムを担当した。

2. 研究成果

参加者5名全員が5回全ての集団セッションに参加した。プログラム前後の中央値を比較すると，COPMの満足度は5.20から6.66，WHOQOL26は2.92から3.23，GSESは36から50に向上した。一方で，COPMの遂行度は6.00から5.80，認知行動的セルフモニタリング尺度は58から56へ僅かに低下するという結果であった。

終了後のインタビューでは，参加者全員が活動日記を用いた集団プログラムを今後の自身の生活に役立つものであったと回答していた。また，「自分を知る機会になった」，「自分にとって大切な作業経験がわかって，これでいいんだと思えた」，「自分にとって楽しいことをみつけて前向きになるように出来る」というポジティブな感想が聞かれた。プログラム終了後に2名の参加者は活動日記の記載を継続したため，記入用紙を担当 OT から配布し，定期的な振り返りを実施している。

実施施設の OT からは，「積極的に楽しそうに話している様子を見て驚いた」，「プログラムの中で紹介された知識について質問があった」，「日記の内容を通して話をしてくれる機会になった」，「継続して日記を記入できるか心配していたけれどしっかりと記入されていた」といったポジティブな感想が聞かれた。一方で90分という集団セッションの時間については，他のプログラムや病棟日課との兼ね合いを考えると継続的な実施の障壁となるかもしれないという意見もあった。また，集団セッションは実施していないが，個別プログラムの振り返りなど，個別アプローチの振り返りに活動日記を活用しているという意見もあった。

本実践報告からは，結果を一般化することは出来ないため，今後対象者を増やした研究や，対照群を設定した研究が必要になると考える。プログラム内容についても，精神科病院という特性を踏まえたより有効な方法の検討が求められる。第一に，具体的に作業に取り組む機会と，その経験を振り返る機会を組み合わせたプログラム設計が必要である。今回のプログラムでは，作業の遂行には直接的なアプローチを実施していなかった。そのことが，COPMの遂行技能の低下に影響を与えた可能性がある。先行研究の対象者と違い，精神科病院に入院している CL の場合，自ら作業を選択し遂行することに限界があり，そこにサポートが必要である。CLの大切な作業を中心としたプログラムと組み合わせることでより効果的になる可能性があると考えられる。第二に，臨床実践における方法論の確立である。今回，地域在住の高齢者向けに開発されたプログラムを精神科に入院する CL 向けに内容を一部変更して実施した。今回得られた知見をもとに，プログラムの標準化・パッケージ化を進め，より広範な臨床応用を目指す必要があると考えられる。特に，集団セッションの実施時間の調整や，対象人数の最適化などについて検討を重ね，今後の臨床研究に活用していきたいと考える。